

5分で読める教育学(#1)

柳本

私のこれまでの大学院(教育学)での学びを、少しでも還元したいと思い、「5分で読める教育学」をはじめます。

ブログっぽくなるかもしれませんが、お暇なときにでもお付き合いください。

さて、第1回目は、学習指導要領ってどうやって作っているの?? です。

1回目から堅い話題だな、、、って思われるかもしれませんが、大切なことなので。。

答えは、ズバリ、「文部科学省」で、教科調査官とか視学官という人々(元々は教員の人が多いです)が中心となり、約10年に一度の改訂に向け、中教審などの答申を受けて、「〇〇に関する委員会”(「総則」「各教科」「総合的な〇〇の時間」など;大学教授や指導主事、現場の先生などが集まっています)が、たくさん存在し、そこで長時間論議して作っています。

今回、一番お伝えしたかったことは、学習指導要領の改訂で、非常に大きく影響しているのは、『外国のカリキュラム』だということです!

「探究」の概念の発祥は、アメリカ(デューイという学者)ですし、「資質・能力」の概念も、アメリカやヨーロッパ(特にドイツやイギリス・フランス)発祥です。

「コンピテンシー」という概念を和訳するときに、「資質・能力」となったわけです。。

もっと学びたいな!!と思った方は、本を紹介しますのでぜひどうぞ。

『21世紀の学習者と教育の4つの次元』(訳本) 北大路書房 2016

## 5分で読める教育学(#2)

柳本

第2回目の話題は、私が研究してきたことについてです。

私は、『児童・生徒の空間認知』について研究し、学位を取得しました。

具体的には、月の満ち欠けや食の現象を扱い、それぞれの現象について、学習前の児童・生徒はどのような考えを持っているのか、外国のカリキュラムでどのように扱われているのか、そして、どのような授業を行えば、正しく空間の認知を獲得できるのか、などでした。

月の満ち欠けは、小学校6年生。食の現象は、中学校3年生で学びます。

はい。ここで問題です。月の満ち欠けはどのようにして起こるのでしょうか？

きっと学習前の子供たちは、「雲に隠れるから・・・」「地球の影で太陽光がじゃまされるから・・・」などなど、、いろいろと答えてくれることと思います(素朴概念)。

あ！正解がわからない場合は、身近な理科の先生に聞いてみましょう(私を含めて)。。

もう一つ問題です。

昼頃、東から上ってくる半月は、どっち(右側か左側)が光った半月でしょうか？

ヒントは、お月様の光っている側に太陽がありますよ！

(携帯等で答えを探すのをぐっと我慢して、まずは、ちょっと自分で考えてみましょう。満月って、昼間に光ってないですよ(これもまた、ヒントになってますよ)。

あ！！ってひらめいた方は、周りの方にも教えてください)

私の研究では、立体物の光と影(陰)と空間認知について論文にまとめました。

身近にある月。文学作品や歴史的な書物にも数多く登場している月。

月のクレーターも、よく見ると影(陰)の部分がありますよ。夜にぜひ観察してみましょう。。

## 5分で読める教育学(#3)

柳本

第3回目の話題は、探究のレベルです。

下の表を見てください。探究の研究者、シュアブとヘロン(1971)という人が書いた論文にある探究のレベルについてです。

	レベル	問いの想起	探究の計画	結論づけ
0	確認・検証	教師	教師	教師
1	構造化させた探究	教師	教師	生徒
2	導かれた探究	教師	生徒	生徒
3	自由な(open)探究	生徒	生徒	生徒

表にある、「教師」や「生徒」とは、どちらがその活動の主体となるかです。

たとえば、確認・検証のレベルの探究は、すべて教師が主導し行います。  
しかし、自由な探究のレベルになると、すべて生徒が主導し探究を行うというわけです。

探究って、すべての過程を経験させなきゃだめじゃないの??と考える方もいるでしょうか。

でも、部分的に行ってもそれは立派な探究なのです。

はじめは、テーマを与えて、ある程度のルールを引いてあげて、結論まで導いてあげる。  
しかし、少しずつ生徒ができてきたら、計画や結論づけを任せていく。

問いの想起=テーマ・仮説設定は、やはり難しいですね。

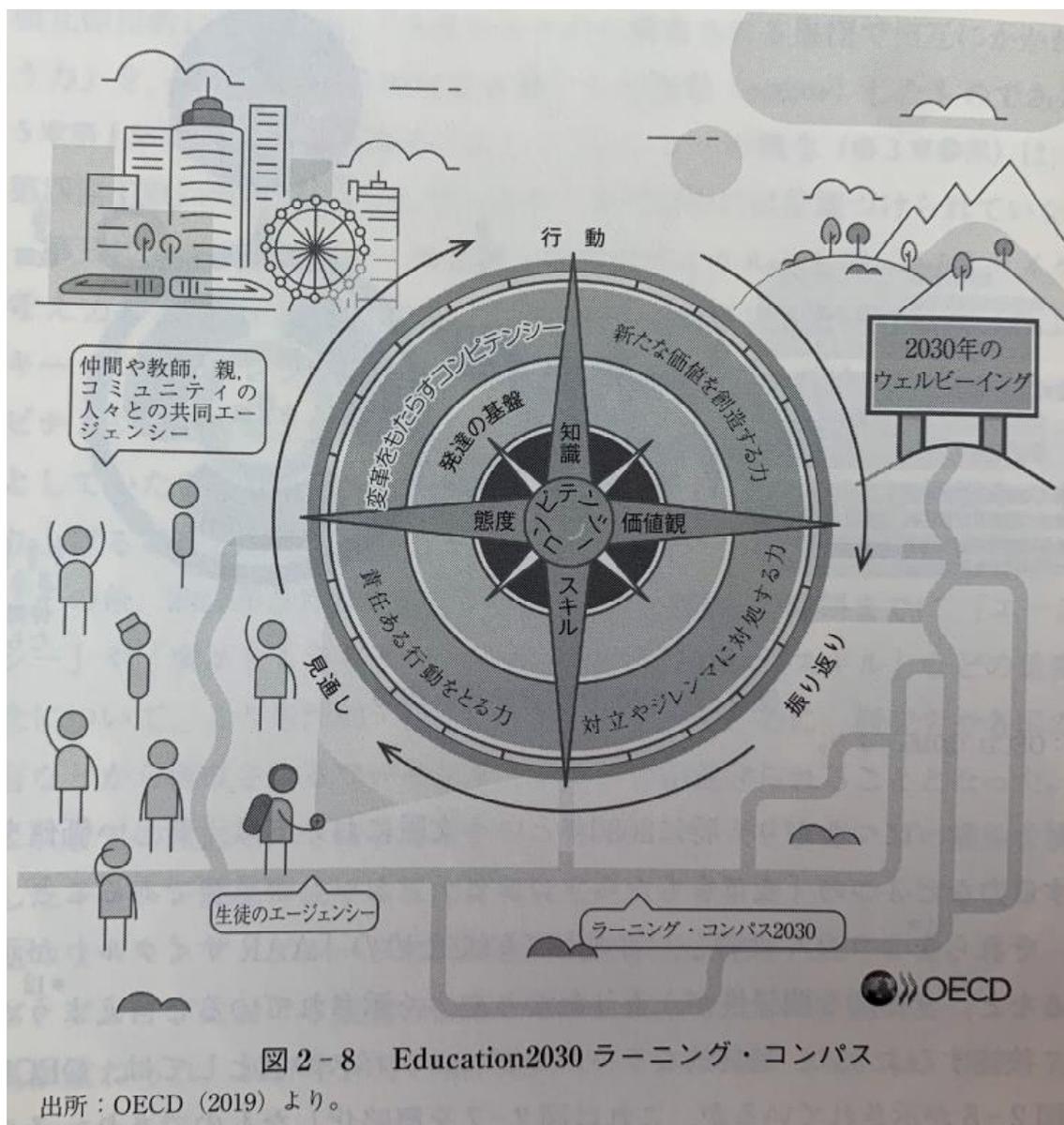
大学生でも、研究者でも、ここがやはり難しいのです。

この表をちょっと意識して、探究のレベルを少しでも上げていく指導(ファシリテーション)を心がけてみませんか。

## 5分で読める教育学(#4)

柳本

第4回目の話題は、ずばり、「ラーニング・コンパス」についてです。  
この図は、見たことがあるでしょうか？



この概念は、OECDが2019年に出したもので、2030年に向けたウェルビーイング(幸福で肉体的・精神的・社会的すべてにおいて満たされた状態)を獲得するために、生徒が持っているコンパス(学びの羅針盤)が、エージェンシー(未来を切り拓く力)となり、不透明で困難性のある未来でも、自らの意思(コンパスを使った自己調整力)で、よりよく生きていける力を育むという考え方です。

いまの学習指導要領にもかなり影響しています(特に、「学びに向かう力」を定義する際の源となったもの)ので、この言葉はぜひ覚えておいてくださいね。

参考文献:OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来 (白井 俊 著)